濱松哥國芳
淺山芦國画

檀勘左衛門誠忠傳

山東京伝
尤松亭蔵

大和國筒井清水

巻之三

へ13
3175
3

へ13
3175
3

昭和九年
九月二九日

# 大和國筒井清水卷之三

浪花　濱松歌國　編集

五畳

老狐

ものいひぞとていつども。檀那ゆたかなるつゞ隊たかられる。儒者の徒候いらよりなどべ。細川。山名。斯波。富樫の名家なり。伊幸して動きまつとなきまんとて。檀毋まゞ行去と称を求めうしろのまおらきどと先と幸ひまをかうんぞう所を。さきども何出り。身をや忍びうん。為て在家を知る人形し。家に秋の隙の里。猪熊丹下とらの一個浪人ありて。老母式養ふ伝うもなく。其日の烟も絶ゝ小ぎ一ぎ。付う絶

世上の風雅を学ぶ。角井の良臣檀効左衛門は、[illegible]に奥大の
右節と[illegible]。若年八功を倦ざる。遂に国を[illegible]し、楽を石橋に
求む。西小路の求むる。備候[illegible]ありとの事、急行帰と云。我
年月[illegible]家ふ[illegible]して一人の母を安楽に養ひ[illegible]。仕
度の[illegible]あるとき。いまだ青雲の時来らず。世を秋篠の里
住んも口腹[illegible]。倦倖老母ある我身をば檀効左衛門と
名乗る。何ぞの諸候いかりも仕へ。侍奉を以て大孫を扶
とかうひとしく待志ぶ。効左衛門うとうと性る倦按
ぶくて八歴と雅うとも[illegible]。[illegible]年[illegible]。歌うふ[illegible]
[illegible]年室町殿林義教[illegible]。我[illegible]不須敵[illegible]

りのと所持を乗りの鞍を西域に大のぶ[illegible]獣の皮を編
く造[illegible]しもとびと這鞍の[illegible]を板へそれを澄
楼に仕[illegible]して母子業利を極[illegible]と[illegible]倦倖已が[illegible]に
舊くを来[illegible]し草[illegible]帝と鞍の形に造り老母を[illegible]
言[illegible]ぜねを何[illegible]も[illegible]人舎るふる及びと母を負て何ふ
と[illegible]を何[illegible]絲[illegible]も任到し秋倖の里を[illegible]に[illegible]
思びを平群より河内の神[illegible]へ[illegible]る十三嶺へ[illegible]
延[illegible]まく地彼方の藻[illegible]に年[illegible]る狐とおおしく
何ふ悶[illegible]ちしやぞくくとひてうとえ若しと[illegible]
ろの法人義林の法[illegible]を見ふてくくに倦とんくやぞて

丹下
曲日九口

狐の傳ふ言葉。母と石上なる軍く働たる市籠より菜を
出し狐の口ふ含せあ財ひつてにより手を入引出せば手竹の
串なり狐ちうまし〜ぶふ人語を吐て我を伏辺ふ住む
此狐なるが昨日茶屋場より大和へ渡ふ魚商人の荷
を奪ひ食ひしが計らずも奥の串囲ふ立ちて苦しさ
いたん方なく孫兵衛ふ乞ひ求ふて来て形ひあつる
ひうがるは伏ふ付ふ思いりの世ふハ高を〜まる者き不業
為方なる我なれだ行すようび伏屋のみはらバ実ふ作せ〜呉今
の伏恐と附する迄ふ吐へまて〜せんとふ法人もたひふ雀踊
又の母を養ひんあるを知らぬ事ふ須叡の仇あと送り擅効者と



名家ふ。仕官せんとおりふふ付武芸の役を欲ハさんたえ
きつ〜のう〜と計らふ思ふ組さ仏ひよとト合ひうび
狐を送ふ〜ぶうぶ〜まと母と屋〜河内国へ渡り
脊うげとうを送ふく狐いい孤家の中ふかうをめ伴の浪
人い河内国古市の里ふ来ふ住りむふうを高屋
のる護代遊佐河内守の家来誉田曹吾主人の命を受て
擅効者の在家を訪んと日毎ふ来ひりう他出ハ
いつものごく今日も又擅効者ハ去を求めんと古市川へ出
ふふ。ふとも孝子ふふて老母を負う武人よ遇ひ
浪士よい河内ふ河方へ来ふうやと訪うま。破笠をの

清らうんと云づく。系いは大和國の去武家方に仕へしもの
なるが。子細ありて浪人と相成。一人の母を伴ひ。駿を立
ち。往い行山里よりあべ二君に仕へじとおりひしうども。
命僅うして母を引返すまでとなり。再び仕度を致さんあり
都成ぶ〜いと。孫〜すうよ迷ひるうち。曹吾は猶の新村合ば
備い仁えい筒井家の家臣擅助左衛門と尋ね。浪人
寄うるづさいうふも系いは助左衛門ようしも推量
致さうとうと。ようう曹吾平伏して。拙者は西國の
ち後代拙住河内ものが家来誉田曹吾と申者。先度
筒井家よりおく。接部の出家をうし。國をうし。





及ばずとうと人逃亡よりおぼしく。小和の河内守ふひ。
何の辛客ふ。もあ成。西國ふ迷留下さうば出の誉れと
いひ。家の面目にいと。待ちうう頻うるまば仕流したうと
浪人い。行も動たるつと云ハさんと。帰の嚢を出し系ふ
とう。一ふい信仁の身にして。室町武林義教云うう領
せ〜不須報して。大切のあるとぐも。夫人鑑へ何云の砌。孫見
致さうとよと。後年ていひ。曹吾は擅武連うう拙
さんとの歌ひの。行上と行。猪隈が鼓の角鷹爪刷して。
盛佐の鼓ふ云を。河内守殿。収兵隈うるく。早速身さん
さんと作あうるまへ。老母は誉田の宅ふ。孫〜偽あの鼓を擅乃

曹五郎はとくびの御ぞふ出きば拵佐氏動たまつとに後ろ立て
ゆ〜ふ似もやうぬ擅が人柄悪し名れども流柳よりぐた
武林ふ。お外の縁成扶系せ〜とゆ〜ゆされやがて不
須縁成ふ。ふ。一見あるよ。何とゆ〜こそとはざる知あれば。
とと虚実を紀さんあるこそ月はたあるぬ体して至と下られ。
叢田が麦して休ぶもぐし〜この御畧ちちと曹五も流よ。
雀踊く退出ふ〜ふ。叢田が私竜の裏ハ殿続のふ。
裏拵のゆ紫ぐろふ。西吹風銭を。結ぐる寄の玉ふ
夕陽斜ゆ〜ふ。ある新のゆよあの新ふ〜を用面
ぐそば正ふ。狐と見ゆ。備ハ家のよ〜ふ立ふ。れも



やらめ宅ゆあふ敵さよいで叶業富ふ一前ふとん
のとと曹五つと立ふ。ちゆふ銭けしと動たまつ階
ふ拵ふさふ怒ふまとふ〜や只彼ふ行決さふ斗
ふて見ゆんと長柄の法えおふし投抑しておの新を用
南ふTどふさあるとひふ〜甚新がいと倒ふ〜ぐ
上ふ狐一参帝ふ。辺去んとせ〜かどとをくふ已御と
ふふゆ見〜ふ今ハふて猪ふ引ばゆそ塀を使ハあ面へ
新下ふ立ふ。ふ新の方へをかふをめ京人曹五ハ動たまつ
ぐ武術ゆ〜ふ。扮ふ〜と新どふふ日ハ山の嶺さに春
石壁ふ成形て風系ふ〜佳ふ〜ハ酒を今下ぐて終日の

芳を武蔵野と称せんと。教立を仰け。幼な妻の奥に示して。一絃を
とけるる

落日孤城野　黄昏屋上烏
婆心寛二一　前　乳草原還鳴

書もまた拙うしねい。文武兼備の武人なりと。狂作の蕩中
ふい称賞をぞ。ふる。

徧者いふ。先ず十三山頭に。かみく。浪人孤の愚を助けし時
付きまして。ぶを報ぜんとこひしに。老狐い福徳とる人る
ものなれば。速く我に仕へ。ことを。その縁へ向直まるべき。為
ふいさば。我が恩の報をぞんぞ。かりふ。ひ全く一命と



えよいあらばと。約せしが。早くも。狐まりて。浪人の
武術成熟いさせらる。狐も一変身を変じしるに。邪路
小徒引せらる。恥らしくておりもらん。
丹下い対照十二ぶに。調ひしうど。狂く英名を裏して。大福
を切んと。一日。東人曹吾ふむ。足下の門孔成ふ。
あらのじの高恩に奉公仕ぐ。身の約束。安石ぶ。是とも
徧に弓矢神の御加護なまば。高園に。結産まし。誉田
壺井の八幡宮へ。詣んと。なるるうして。出行んとなるに。
僕を召連らるとあるれども。思びの糸。絡まるまば。獨歩て
そ。ぶやとうるとして。蕩中を出。誉田壺井い。行変はて。十三

嶺小ゑり。氏そを彼そを。とそ。しかの老孤は再び生んと思ふ
公通じて。聖孤い農まと化し。浪人ゞあるは孫を打く三物
ゝとばゝんの田紘を変ぜず。公田曹吾ゞ屋とはまり。我はて
かゝをさせる一孔を述まうゆ妖怪ゝめりて。諸人を惑し
藩中へ石を投げまどせよゝ怪系ゞ武術を以くゝを
近んと。虜を世を蟲国の法と紘ひ。ゝを抓ゝり妖怪強ば
いゝゝ河内ち保伏すして。高孫をかるうゝべ。海ゞ宮も呆進
さゝんと。ほゝ待るる孫公のゝ法まゞ孤の公ゝも行潰ゝ
おりひゝんかゝ酒ぐゝ矢ふゝり。公田曹吾い姫後の宮ゝ行妹
かげゝり家ひて。王居を歩く弼馬の正弁ゝくとゝ考ゝん



上い系ゞいひゝけゝ。縄ゝけて逃ゆらんとゝるゝ浪人大ひに狼
狽逃ゝ出ゝして。家来大ぜい追ゝまゝるゝ小ゝゝ
いゝゝゝ。拵作の鍛へゝ功くゝる。

## 六面　夜嵐

泉孟堺の浦へ系師小安らあ。堅死の化ふゝて。死車風流を
好める家ゝ。そゞ中小一万代屋佐氏右ゝつといつる。系物の
商人ゝりるゞ。一個の少女ともゝて。容貌ハ他ゝ移ゝゝ。
父母の寵愛ゝうぞりゝ。美至室所家へ入仕へゝるゝ
指屋の富家へ嫁ごうゝさんと。月死のごくおりひゝく養育ゝ。
二八の美秋とゝるゝ。儀家に小同柚屋戈三郎とゝ弱男と

丹下の母






丹下
その女

人ちゝび妹脊の約をは。二世までも変るまじと比翼の
契り浅からねど。姫宮を女ゞ父母ハるく はすを ゑしゝび ちるとく。
都の富家の名よも似ぬ。山家屋甚六とて。絹帛成商ふ方
ゝ。宮ゞ容貌をゞまゝしゝと学ばけ。求人として書よ正ん
とて。世言の媒介れ孩の草雑しめをて。紫交ゝまく糸と
湧へ上下して。強合倆ひ。山家屋方ゝう納采を送る。日まゞ
娶んと黄道吉日と撰ふゝ。彼才子帰宇とひゝく怒采
と変し。父母ハ驚もあまゞ。宮と女ゞ我への拒ひとゝとれ大身
舟の山家屋へ嫁せんとふゝハ宗玄日日と送らんとて。
変しに舟と振拒しゝ。恨みの往をたゝひ



知らせんと。泳ゝを一掬の寝刃を合せ。との怒語のみぞひ
せし。蕎飯使女と呼出して。宮を女ゞ石ん屋形ゝと憤とう
ゝて恨みのいひゝかをれ。此知まで拒さくをよ淫婦ゝ類恥を
ゆゝせんと。舟を震ハして匂旬まゞ。蕎飯使女此容るとえく。
此憤ゝを理るまゞも。息女此寡へるゝさゝるゝ乙ふゝ
ゞ此変の縁組を俳ひそうふ思び出んとおもはまゝ。その
ゝん系とゝく。契約せし悪人のゝゝ中。高祝の責問ゝゞる。
白状ゝ行ゝ出ず。只都の縁を伝ゝ叫ハゞゝゝ宣へゞ父母
第引まく奥の間に押籠あまゞ。出身ゞまゝ。ゝるひしゝる成
密ゝ伝ゝく立せまゝ。ゝんゝ少時ゝ面ゝ義をゝしまを。

待ちて狸へ入ふり却説擂鉢助右衛門と名乗り猪隈丹下の
外の上臈殿より及び叢田曹吾ハ三人の廉忽とゐれて十
三歳より引きそうを主人河内守へ言ふとゐ日左人と
有くる一人の浪人擂鉢助右衛門と名乗ふ仕ふ帰ふ孤
彼者不持の不須艱も偽あと云石を虚実と相孔ん為
毋なあ人を釣り密より容ると探るとゐ叢田壺井の
両社へ系譜仕ふ転宅とゐ生ル其体不高くぞんど
位ふ行先を疑へば十三歳ハいそう雄孤と名乗ふ農
まと化して密伝より及ぶ甚る細いやうふ形ふと頼未と
妻ふ中ふ先日雑粥とふ孤を拐せふとゐ

雄孤ぶ見と報ずふと字ふ石を拉河内守完尓と寄
笑ひ仮ぶ使ひまふし時ふ本人の骨拐とりハ不須艱も金忘
行ぶとおりひふ紙推参より遠ゐ英名を偽つく高孫成
ほんと貝倫接面去其罪軽ふねどもいまぶ一会の孫をも
ふへざとゐ浅とふもあふぶ化門への字へを脱ふて偽
仮より計ふべふて和泉と河内の国境ふおゐく丹下ぶ
所持せ偽物の艱をもて石田井をくゐ石沢ふのぶ母と
負せて退払ひふぶ石地ふ猪隈ハ孤福を教ふ呆れと
ハさんと楽ふ平癒も形く我力ふて首斬ふとふ
世言のぶ已ぶ遠ふ艱とふく石田の娶貝にあひ

小も角もまゝの時まらざる為命を脇ゝるべし。十町
余里来る時偶とかゝへ出て。出玉ゝて仕損じ遠
ゝへ行く。擅助左衛門と名乗るべき住宅をもいらんその
時の陸接なまば偽物の歌とふれるまが孫要ゝて。後
偉道の傳る。辻堂の程へ毋成祐せ至陸頼火にゝるぞ。
御ゝ接し偽物の歌ゝ行ゝて大擅なま。塀の陣まゝ才
三郎。室を女小ゝくゝ細をゆ中ゝ代表へ嫁せんん座わら
ざる。膜ゝい時るといへども。まゝ今ゝ小狗ふさゞり。狗家成
ゝりしとゝゝ我多い密ま図るまば時之の紐も見限り
父母の免せゝ塀とゝ夏女の反とゝゝしよさゝゝと斗



云捨て立ゆらんとおしゝをべ室ハむゝふるゝふてゞり。
才三郎と押ゝ。二世と変ゝし二人ゞ中。石ゝ加ん
とゞ。遠へる狗妻ゝ。ハ四月ゝ。ゝまゝ。せて一日所時
夜命る。広ハさゝ小ゝゞ。河川へも外と沈め。未来の
縁と待ゞとて。かけ出さん京をゝ。其負帝を少ゝハ。
我ゝもまゝゝ。世の夏国をゝんゝ。一ゝ美小夜と
ゝて。会至の楽ゝ極ゝんと。会ゝ家国土いざや
ゝ約を長ゝんとゝ。小ゝ成ゝ長び出て。一ゝゞ。ゝ
約陽地法地の塀の法ゝ至出ゝも変。地二人ハ法を足返
ども。嫁ゝ。遠ゝの人新ゝ。ゝ身ゝ成。ゝ

たどりてこつぞしがあやうよそうし道の程まで案内の手
に信心せし護身嚢とあなどりしが偶と名付しうかの護
身嚢よい。拾尾山の九宝の守もありて朝夕よ絶ず戴き
まいらせしふえ幻の今宵落してたに未来のまもりいもらい
やまと何とせんうと泣うむ女のこころ成汲とりてたたずに
おりしかちうまらべまうしと互を手ねうんもあきざるすも
あるまじとこそ思ふ傍ふ一字の辻堂ありうをば見侍と
園女と思ばせむ時こそふ待まとて。えよ老婆ぶ居るぞ
こも。彩しぬぶ仏邪ふらめ。才三郎ハ引五しえ来しこそく
尋ひり見や妹脊の中絶こ。思ひこそとめよとい後ふぞ



おりいあらううる。河内の方より猪隈い報携くいさせと。
こ角りて以前の辻堂。猩とのぞけば去の表ふあらねど園た
美うし園女ぶ色の梅花の匂ハテ不寄しと疑ぶうち。
忽地悪ふ再爰して。そこそこそこれ探ぶ。ハ才三ぶ
ゆうしとおりいげけること猿畫ふを捕へ引うとげ。と殿
とかけて以前角とい彩ぶ才三郎い息とそうに文りとう。
実と女とおりい老婆ぶ。ふとうう。護身嚢とうと国路と探る
向ふう。遠近ふもと付らをばん付らをて二人とも生恥成
ひくんうう。禁ふ。相累て。永き未朱いかうぬまぬとうど
ぞえめ聲の老女いつも帰ふる。仏と。什方いそ汐の称名

と夢とさるくよ貴く向丸子員い若しむうううもヤレ人
殺しうしと呼ぶと生て南を三室人遠へうと狼狽る之間に
近づく人ちよ元付らまじと我と気荒うれ切ういと伏老
女と共ち良絶う。経なく寄る謂の退ち。者三郎が死殺と
ちく。速言ちと速しうよる宮をいふと四辺と尋ね火新ち
遠甘ごといいふ。雲うふまぐれ女四ふあうで卒都婆小
町をうるぐれ。老婆も朱ち深る光系うるく不富時
中ぬ。中も氷人左平次ハ二人の死殺をとくとたて。ハテ
仏ぬ。ちいかうの川ちふ。浸名を流せし昔弥。四十道地
分をうう。十四やうのが女と。一如ち死ぐる例もあるぞ。



裏の裏白く寄世とて。サ弥うの子男とゼ十ぐうの婆屋と
右未稀うる弥ちうるまども。宮を女ち分ち八函ちうるうう。
狂くふ。成弱ぬべし。先別屋まて拾ちる。濃ち裏が慣
ち濃拠。ぐけや者ども。ちげや人。かの唐土のふとちうう。
ち人が付ちうち知て。軍卒の渇をぐめんと。梅の林のうと
いひし。秘智ふ員ぬ。左平次八尾ち平野ち至ちるべ市ち
屋寺ちうち。温飩蕎切ちるまいん。ちや教ち小湯ちんち。
酒もぶくいんさせんと。ちんちをくんで蝶分ハ者の後ちう宮川
し。ちく引ぐうてたぐひく。却説浪人猜張丹下ハ老母と
拵て園女と肩ふかけ。ちふまうせちうし。ぐ行みく教

もゝく面貌とるに。絶世の美人といひ。年齢八十六七と
おぼしく。有利をはくうと大よ雀躍。難波の津の南町。
名古町へ連行。備国の花街へ。拉女の形美をゝ。生海鼠の
八九帝とゝふ者のゝふ。夢後し。大金はらく。浪人丹下い
ぶく何国ともなく立去ぬ。園い恋人の主三郎ふゝきて。生死し
知もざるのゝ。我身い形美のまよ。夢後さゝ。ひも
ようゝぬ鳥とゝ。ゝれ。死ゝふも死ゝぬ身のよ。何年
して此恋を逃を出ゝ。恋人と偕も。冥途の旅路り
辿んとハおもとゝ。大金よ換る奉公人と。名近ん
ゝもなく。流よ良の京ゝ。未過の花街若竹屋の



松位初濃と。一傾の玉よ。千人の花中張の朱唇ゝ
客嘗と絆し。娼妓の洗猿しき身ゝ。朝よい吾妻の
人よ媚夕よい紙衾の客よ戯まて。其金望一時ふゝ
ゝ。国名井の様よい擅効左ふつゝ。徐右ふゝ。名殿
順秀殿。再生ありし。ゝ地まて。大殿順永法下を始めゝ。
一家中の欲表大ゝとゝ。殊更効左ふつゝ。治国平天下の
法と。教導ゝ。是しと有ゝハ。大国の主と称ゝ。
民を極育の慈恩偽ハ。ゝ人ゝと。家臣筒井左門ゝ
進めふゝ。順永公も病後よ。政事を執も苦労よ。名
ゝと。順秀成もつゝく筒井家。四十四代の世代絶せたまひ。

筒井の清あらん限りは、玉水絶えなんとて、万こ累をぞ従
けるゆ、山田順春、高取玄蕃頭、係斗楽と相議し、
又りや西人既と結ぶ悪事成計校め、玄蕃一口の
毒酒と出し、凡人の心の動き易いと欲す。順秀何程
学文成ぬ、酒色の道をとゝ避らくとゝ思ひ、日夜酒色
と虜め厚ごさ人和をこゝ五例設として、既迫させきりに。
拒軍の通ひとゝ、自然と悪り成厚せ。京都武林の。
上学よりとゝ、計つるが信ふ升ふるゆ、接待ま
いひなを世上の人に分拒絶の踪跡、他門の立場法よ及
ぶん。夫君に宿領家へ術策をりめく内通は、順秀陽居



さゝぐ、しゝと、云命を備へ押迫の多くるゆ、明へ見出も分
家の夫君ゆ、筒井家相続の人うゝねが、家ゆ
金く成行仕へしゝ、ふるぐくゆふぞ、京来敵広張り
おゝ山田順春、雀躍して、欣び、ゆ斗ゆ、発角
海ゞ討策ゆ、ゝとゝ、密ゝとゆ、合せ、順秀を怒し。
悪計成ゝ厚ん、肉ゝ行使の策法を撰び、例ゝ付至
ゆ、その学ゆ、生弱傳五右衛門、盤格新を偽ゝ輪門翻夏。
十市武子太、笠置伝右衛ゝ、帯同ゆゆの者ども、弁舌へ
海とも山ゆ翻す曲漢、高取玄蕃ゝ同ゝ、ゝて、ゝて門
節もゝ、人と悪反に厚んとゝ、ひゆる。行ゝども順秀

生涯名の残ひ心しなく。再生の恩愛うく。擅動左遷つゞ繼
おれにもくゝ孔孟の学よ志し。深く。婦人と遠ざけ。平日に近
ん侍学よ對して作せるいと古よりふるゝと。酒色の図お
と立ちたる。挙て数へべうべきを。呉朝の昔と考るに殷の
紂王の。妲己と寵愛して亡びしゝう。周の幽王とはじめ唐の
玄宗皇帝など。貪く婦人のみに図没據れし。万民苦
と業う。祖先と辱うしむ。我不日よ。例よ母を
亡ぼす。天下亡治め。一家をおさむるも。大小呉なりゝ。
甚哉ハ日下。海学ゝ。道と法むべしと教化せらるる。
芝ゞ流石小酒と鷹なるる。けひがゝて。後よ月日



と費しゝ。一日順秀の日通りふく。既近四方山のおの序
小生約伝又右衛門中。我君子日市学文のゝ心志と
ゝゝゝゝ。自然市年芽の病など発せんと。市嵐門の人
ゝゝやとかゝゝ。這ゝの春の日ゝ長を形うれハ。市
芽義のため。ゝゝ世と拒後ゝせらと。宜しかるべ
なる。まゝ身山部南都木辻の廓小和漢と中遊君き。
西行法門と和歌絵せし。江口の君も考らぬ歌人なる。
それのゝすべ。詩ハ即序よ五絶七律言語よ珠を含ん。
絵とるとの元法いうる法歌と住るゝ。心楽をるふなどれ
ば。市屠ゝうゝ。元徳の風流。良い初衣ゝ容貌法語ゝ

らきはんやと。徐々毒を源流せバ驥尾に附く慙愧の謂。二
輪川靭負。隣五右衛門が心を悟り。何となく此男もかの初瀬が
風流のうハさを承りぬ。小島大学ハ其身儒門の人なるが故
和歌ハ我家にあらず。詩文の贈答ハ家業のよすがなれ
ども是なる女学者。ござんなれと仕つけて居まんと。木辻に至り
初瀬と詩の贈答せしに。大学が詩織なるうに劣りしとの
評判へそれとハいふ。須香寛永に笑ひを含くのひ。靭負が中
ところがありつゝ其意を得ず。小島大学にいたれハ天下の詩
人なぞ娼婦が柔と同日の論にあらず。殊に一藝に通達
されの一代の誉りにあらざれバ。天下に名を知らるゝ斗ハ



錯しられに彼女何程の才識あらんかハ知らねども。諸藝を
悉くおもひそこしざまに詩歌をも作るるごときハ心得がたき説
なり。それ俗にいふ石磨藝とかいふる類ひにして。一藝の研究をも
なさずまぎつの道に其端を学びて間に合をるとかいふものの
言ハ信用しがたきものなりしが何ぞ行て試るまでもあらずと
又按するに是まで詩文をまじへざる事贈答せんとおもひしハ大なる
誤りなりぞや。学んで若しさせバ事毒も生せん。我いふこと言を
用る時ハ心を清く呂顧余念なくひ快きつ代おはべかる
悲悔の心あらしからバ学文ハ長寿の良業。其よし和漢を博
識の人に長寿なくこと保つものなくし。凡人の身として嬉るも恐

あるるるれども。周文王は聖王ふして。九十六ふるまでと長寿しかりしが。周と再孔る。ここか長寿とるべしとの。命は大数にうるるものして。学ぶべきれば。夫孔をとらんとるの成すば。千古の稽古と明らめんとせば。朝言暮接に登まとらんるのあるべし。常日て経星紘うんとすとて引ままはねば。好医をくしを猟んて居るべしが。生駒伝の右墓つの中ろは。只今の所とて居るなるふいれいばと。いへども。孔くく生徒といかはかるべし。その一通を好む。実は病のおとろ。杜頑うるよ。我よた伝の解ろうとせいれ。見るの。若学ぶを好ませのくべ見的のる。学芸と生ぶるき。得まるべしと思ふとらべども。和家門方法は和に安うべ和に



和をもとしてもこころせるべ。別極は和学問は仕せのべ。和芸病医発しのべんうと。何とも和意を安じたまべ。其上医方の和学は。紀伝明経の博士とかふもあるねば学く書籍の研究をとるしうべども。宜しきをふなど奉る和国政を執らせるまでの和学のよは聖人の及ばるべ。六経のるとを和ふるべ。本学べ。詩を能を文武備るは。平意世とふ心とす。世傷の業。る何ぞ玄学の風流ふして。ふ聖賢の伝べ。いざ。古へ国を紀しる。大を屋。蕭何。孔明のごとく人いうべ。経典を学びしるも承はらず。唯世俗と交を。春日小田を耕

一いつゝ行ゑをゝとゝ敬ゝ仕へ申さゝ。ゝ御家ゝハ傷者ゝ。
御国政のゝ小姓癖者ゝ奉らゝ。御家の出ゝ
ゝゝ出ゝ歴ゝのゝ人ゝ殿様ゝ三家の山荘ゝ
御隠居ゝ申ゝのゝ小姓ゝ相勤ゝ申ゝとゝ
ゝゝ。聖人の道ゝ学ゝ父ゝ若ゝ申ゝ学ゝ
漢土の大学ゝ学ゝ孫ゝ若の御意に
逆らゝ。是迄の御孫ゝ死ゝ所せらゝ。
大罪ゝ。顧ず言ゝ仕ゝ。孝ゝ御孝ゝの
道ゝ。ゝ氏恐ゝ。良ゝ君ゝ誤ゝ学ゝと
ゝゝとも書ゝ御ゝを傾けゝ。ゝ伝志の御

ゝ生ゝのゝ。ゝ病ゝ。ゝ。ゝ。御醫ゝ。ゝ。ゝ。孝行ゝ他ゝ孫ゝ。ゝ言ゝ。

筒井清水巻三終